

# 私の卒論

木野 工

先日、新刊の長篇小説の書評を頼まれた。五十二年春に早稲田の文学部を卒業したお嬢さんの処女作で、二百五十枚ほどの作品が一挙に大学新聞に掲載されて話題を呼んだ。文壇的には別に騒ぎを起したわけではないが、単行本として出たのが十一月末だから、ことによると、この稿が活字になる前の一月、年度後期の文学賞には話題になっているかもしれない。作品には、ナマのセックス描写が頻繁に出てくるし、会話がなんとも妻まじく、娼婦の世界をかなり沢山書いている私も（それでも手緩いと編集者に随分こずかれて、大いに辟易し、必要以上の描写を強いられたりしたのだが）さすがに、驚いた。もつとも、描写や会話だけのことを言うなら、酔漢の猥談や娼婦との会話だって、ここまで露骨、ナマの表現はしましいというほどのものが、三流週刊誌やスポーツ紙、夕刊紙などの有名作家

の小説にはふんだんに出て来て、大ていのこ

とには驚かない。青春小説などと銘うたれているものには大なり小なりそういうナマの描写がある。「太陽の季節」が文学界新人賞を受けた前に偶然ながら生原稿で読む機会があった。荒牧先生のご主人と一緒の席だった。そのときは、これは実に新鮮な感覚だ、という印象だけが強く残って、後に問題とされた「障子を突き破る」ところなど、まるで印象に残らぬほど、すらすらと読み過した。いまの若い人にも「限りなく……」や、この女子大生作品は、やはりそんな風に読み流されて

いるのかなとも思った。ただ、これが彼女の卒業論文だという付記を読んで、全く別のことなのに、彼女も中年になるころには、この作品を抹消したい気分になるのじゃないかな、などと不図、思ったりした。

私は真剣に強盗を考え続けたことがある。人を傷つけてまでとは考えなかったから、強盗ではないかもしれぬが、書庫を打ち破る覚悟だったから、やはり窃盗の上だろう。何を盗み出そうとしたのか。卒論である。いまは強盗まで犯す気力も体力もないが、これを書いているうちに、気持だけは異常に高ぶって来た。機会があったら、これからでもやりかねない。やりたい。目下のところ、最も親しい友人がその保管責任者たる主任教授の任にあるから、彼が停年退職したら、やるかもしれない。それほど、あれが遺っているということが恥ずかしい。想い出すと独り居の密室でも、人混みの中を歩いていても煩がほてり、息苦しくなる。

私は名ばかりの工学士で、学校には文学に縁のある講義は初歩の心理学以外に何もなかった工学部出である。それも昭和十八年九月の「繰り上げ卒業」組で、六カ月短縮して大

学を絞り出された。文科系の学生には徴兵延期が認められなくなっても、理科系にはまだ

延期の恩典があって一般徴兵より四年ものんびり大学に居られたのだが、前年から半年短縮が強行され始めていた。軍隊が若い男を必要としたというより、工学部の場合は産業界が技術者を必要としたのである。それなのに、卒業と同時に、徴兵検査で不合格となった病身の友人が唯一人大学の研究室に残っただけで、残り十九人全員が軍隊に入れられた。

そういう時代だから、学生を卒業させることがが大学にとっては第一の仕事で、学問研究は二の次ぎだった。工学部だから実験の課程が多い。しかし、資材不足で共同実験が主となり、本来は一人でやるべきものに何人もが参加するから、研究熱心な奴がどんどん実験をすすめ、他はノートを取るだけになる。つまり何にもしないのと同じである。それを踏まえて講義が続くから、非参加の傍観組はだんだん講義の内容を理解できなくなる。つまり学業脱落。典型的は脱落組の一人が私で、他にも暮ばかり打っている奴とか、本業をなおざりにして理学部へ聴講に行っている奴とか、半数は名ばかりの工学部学生だった。大

体、私の在学した鉱山工学科というところはそういうハグレ学生が半分、就職度外視の学者志向半分というところではあったが、不思議に小説を読み耽っているのは、同期では私一人だった。生き残り十五人のうち五人が大

学教授である。他のハグレ学生がどんな卒論を書いたか知らぬが、白紙の答案を出しても、追試で教室へ呼ばれて三分ほどの雑談をしてくれば単位は思ひでくれたほどだったから、どうせ口クなものを書いていないだろうが、先に挙げた主任教授氏は、指導教授（これが日本一の石炭学者だったのに）もその理論を理解できないと無条件降伏したほどの難解な『地圧』理論を展開し、それをそのまま学位論文にしろてもいいとまで言われた。そういう凄いのもいたことはいい。

卒業には論文提出が必須条件だから、単位取得の試験のようなわけには行かぬ。しかし何と言っても「学問」をしないで一年半を過ぎたのだから、研究発表のネタがない。切羽詰まって、文学的の石炭採掘論を志した。もつとも、この主題は工学部に入った時から、やってみたいと資料は一応集めていた。ただ、勉強不足どころが、知識がまるで学問としての体系をなしておらず、雑学の域を出ていないのだから、エッセイにはなり得ても（それを書くほどの能力が当時あったかどうかは別

として）卒論には、とてもとても、という状態だった。

先輩に森巖という秀才の学者がいて、当時は住友・赤平鉱に理想的な炭鉱開発の陣頭指揮をとっていた。その森さんが学会誌に発表していたドイツのルール炭田の調査報告レポートを資料にして、ある炭層状況を設定し、最も経済効果のある坑道（主として堅坑）は単位面積あたり、どの位のものになるか、という概念的な統計資料の図式化をやった。

今は題さえも、しかとは記憶にない。ただ実利と実証を身上とする工学にあって、こんなものが無知のタワゴトであることは確かで夢中になって約半年これにかかり切って書くには書いたが、提出する時に、S教授に『どうかお読みにならずに通して下さい。何年か後に、必ず同じテーマで、読んで載けるものを差し替えに参ります』と懇願した。S教授は『いい度胸だ。卒業を認める』というようなことを言っただが、就職の世話役だった謹厳な選鉱学の権威T教授は「僕の研究室なら、君、あれでは卒業できないよ」と真顔で言われた。その卒論が立派に製本されて大学の図書室に保管されている。何としてもあれは取り戻さなければならぬ。